

# 白滝ジオパーク研究助成事業 研究報告書

明治大学大学院文学研究科 博士前期課程  
尾崎 沙羅

## 研究課題名「北海道・後期旧石器時代における尖頭器生産と黒曜石原産地」

### (1) 本研究の目的とその背景

本研究の目的は、北海道・後期旧石器時代終末期における、尖頭器の製作から廃棄までの一連の工程を明らかにし、黒曜石原産地の開発に関する研究基盤を構築することを目的とする。とくに、(1) 白滝遺跡群における尖頭器の製作技術や、(2) 白滝遺跡群で製作された尖頭器の広がりについて注目し、白滝遺跡群が形成された背景を解明する。

これまで、北海道・後期旧石器時代の研究は、細石刃核の技術形態論や、それを基礎とした編年論が中心であった(吉崎1961、鶴丸1979、千葉1985、白石1993、寺崎2006、など)。その一方で、最近では、石材の獲得や消費の分析に基づく、人類の行動形態に接近する研究がみられるようになってきている(木村1995、高倉2003、鈴木2004、山田2006、など)。当時の人々は、広域を移動し、生活を営んでいたと考えられている。このような行動の全体像を明らかにするうえで、白滝地域における黒曜石原産地は重要な役割を果たす。なぜなら、白滝産の黒曜石は、北海道を中心として各地に拡散しており、その流通形態を解明することで、黒曜石を携えていた人々の移動を明らかにすることが出来るからである。

一方で、白滝遺跡群では、近年、大規模な発掘調査が行われ、黒曜石の産地における石器製作の全容が明らかになりつつある。そこでは、とくに尖頭器を中心とする石器群が顕著に存在する。すなわち、黒曜石の産地の開発と、尖頭器の製作には強い結びつきが存在すると考えられる。それゆえ、本研究では、尖頭器に焦点を当てる。

### (2) 分析対象と分析方法

これまでの分析から、後期旧石器時代の終末期において、量やバラエティーが増加するなど、尖頭器が発達することが分かっている(尾崎2016)。終末期には複数の石器群が併存している(寺崎2006、山田2006、佐久間2009、など)が、各石器群の尖頭器には、形態的、技術的な違いが存在する。そのなかでも、本研究では終末期に注目し、なかでも舟底形石器を中心とする石器群に伴う尖頭器の広がりについて明らかにした。舟底形石器を中心とする石器群は、白滝遺跡群に多く存在し、そこでは多量の石器が製作されている。それゆえ、遺跡群の形成に深く関係していることが予見され、本研究の分析対象として適切と考えた。

また、分析対象の遺跡として、8遺跡(上白滝2遺跡(sb-13))(長沼ほか(編)2001)、上白滝5遺跡(sb-6~11)(長沼ほか(編)2002)、南町1遺跡(北沢・山原ほか(編)1995)、落合遺跡(北沢1992、山原1999)、日新F遺跡(森内1999)、桜岡5遺跡(友田ほか(編)2001)、川西C遺跡(スポット16・17)(北沢(編)2000))を設定した。

分析は次の通りに行った。まず、舟底形石器を中心とする石器群に伴う尖頭器に関する、一連の製作工程を復元した。そのために、接合資料や未成品の観察から、作業の手順や製作技術を明らかにした。また、観察にあたっては、遠軽町埋蔵文化財センターなどに実際に赴き、資料を実見した。

つぎに、各遺跡における製作の内容や、搬入・搬出について分析した。具体的には、接合資料や母岩別資料、また調整剥片や未成品など、遺跡に残される痕跡に注目した。

さいごに、一連の工程の、遺跡間の展開について検討した。すなわち、黒曜石の原産地で製作された尖頭器の空間的な広がりについて明らかにし、そのなかにおける石材産地の役割について検討することで、白滝遺跡群が形成された背景について考察した。

### (3) 尖頭器の製作とその広がり

まず、一連の製作工程について検討した結果、以下の4つの工程が復元された。

段階1：素材原石を粗割りした段階。原石の自然面が多く残存する。

段階2：未成品の段階。器体の厚みや、調整の粗さなどが顕著である。

段階3a：完成形の尖頭器の段階。器体は薄く、周縁には比較的細かい剥離が施される。

段階3b：再加工を施す段階。器体の側縁部に、規則的で細長い剥離が施される。また、おもに彫器などに転用される場合も存在する。

段階1は、原石を打ち割る、初期工程である。原石は、おもに角礫状で、大形である。上下左右から粗割りすることにより、尖頭器の原型が形成されている。

段階2は、前段階よりは加工が進行しているものの、未完成の段階である。器体に厚みがある点や、剥離が比較的粗い点などから、未成品であると考えられる。また、平滑な自然面が残存している場合もある。器体長はあまり変化させず、器体幅および器体厚を大きく減じながら、成形を行う。

段階3aは、完成した尖頭器の段階である。器体は非常に薄く、前段階と比較すると細かい剥離が施されている。器体の下部に、最大幅が存在すると考えられる。断面は凸レンズ状である。

段階3bは、完成形の尖頭器に再加工が施される段階である。器体の周縁に、極めて規則的で細長い剥離が施される。この剥離は急斜度なため、断面は六角形状を呈する場合もある。また、折損したのちに再加工が施されたゆえに、形態が左右不対称となっている個体も存在する。一方で、彫器への転用も一定数みられ、これらも、段階3bに含まれる。

このような製作技術や工程に関しては、上白滝5遺跡（長沼ほか(編)2002）や落合遺跡（山原1999）の分析のなかで、一部述べられている。しかしながら本研究では、一遺跡ことどまらず、石器群全体を分析し、上記の製作工程を復元した。

つぎに、製作の工程をふまえ、各遺跡における製作の内容について検討した。その結果、黒曜石原産地の直近に位置する上白滝2遺跡、上白滝5遺跡などでは、全ての工程（段階1～3）が存在することが判明した。それに対し、落合遺跡、日新F遺跡、桜岡5遺跡、川西C遺跡など、原産地から距離のある地域においては、製作工程の後半段階（段階3a・3b）が顕著にみられることが分かった。

原産地の遺跡では、接合資料等から、尖頭器が多量に製作されていたことが分かる（長沼ほか(編)2001、長沼ほか(編)2002）。しかしながら、製作されたはずの尖頭器はほとんど存在せず、その多くが遺跡外へ搬出されたと考えられる。

原産地から離れた遺跡においては、尖頭器に関する接合資料などは存在せず、ある程度成形された状態の尖頭器が搬入された可能性が高い（山原1999など）。そして、完成された尖頭器の周縁に、非常に規則的で細長い剥離を施すことにより、再加工が行われる（段階3b）（山原1999など）。また、折損面を打面とした、彫器への転用もみられる（段階3b）。その一方で、原産地でも後半段階（段階3a・3b）にあたる尖頭器は存在する。しかし、これらは他に母岩別資料を全く持たず、遺跡外から搬入されたと理解できる（長沼ほか(編)2002）。

すなわち、原産地で製作、搬出された尖頭器が、搬出先で再加工などが施されたのちに、原産地に回帰したと考えられる。

### (4) 尖頭器生産と黒曜石原産地（結論と考察）

本研究の分析により、以下のことが明らかとなった。

舟底形石器を中心とする石器群においては、白滝などの大規模な黒曜石原産地において、おもに角礫状の原石を素材とし、尖頭器を多量に製作する。製作した尖頭器の多くは、遺跡外に搬出する。大規模原産地以外の場所における尖頭器の製作がみられない点や、また接合資料の状況から、遺跡外への搬出はある程度成形した形態で行った可能性が高い。

そして搬出先においては、尖頭器の製作はほとんど行わず、器体周縁の調整により再加工を施す。折損した尖頭器に、再加工を施す場合もある。また、尖頭器の彫器への転用も、一定数確認できる。そして、再び黒曜石の原産地に回帰し、再加工が施された尖頭器を廃棄する。

すなわち、本石器群は、石材の獲得や尖頭器の製作のために、何度も原産地に回帰する。このような行動の積み重なりにより、多量の石器が遺跡に残される。これこそが、非常に大規模な遺跡群を形成させた一因ではないかと考察する。つまり、本石器群の石材獲得や石器製作に関連する一連の行動は、白滝遺跡群の開発と強い関係性が存在すると考えられる。

本研究は、舟底形石器を中心とする石器群に伴う尖頭器の製作工程、およびその広がりについて明らかにした。その結果、白滝遺跡群が形成された要因について考察することが出来た。遺跡群の形成過程に関しては、これまであまり言及されていない。しかしながら、巨大な遺跡群がなぜこの地に存在するのかという問題は、全ての研究の礎となる。それゆえ本研究は、今後の白滝遺跡群の研究に大いに寄与すると評価できる。

なお、本研究は、明治大学文学部考古学研究室が編集する『考古学集刊 第13号』（五月下旬刊行予定）への掲載が予定されている。

## 引用・参考文献

- 尾崎沙羅 2016 「北海道・後期旧石器時代における尖頭器の変遷—黒曜石原産地研究の基礎として—」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム』明治大学大学院文学研究科
- 北沢実(編)1992『帯広・落合遺跡』帯広市教育委員会
- 北沢実(編)2000『帯広・川西 C 遺跡 2』帯広市教育委員会
- 北沢実・山原敏朗(編)1995『帯広・南町遺跡』帯広市教育委員会
- 木村英明 1995 「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31, pp. 3-63, 北海道考古学会
- 鈴木宏行 2004 「原産地遺跡における細石刃石器群の技術構造—上白滝 8 遺跡の分析を通して—」『シンポジウム日本の細石刃文化』Ⅲ, pp. 1-17, 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 高倉純 2003 「北海道の更新世末における石材消費形態からみた遺跡間変異の研究」『シンポジウム日本の細石刃文化』Ⅱ, pp. 132-151, 八ヶ岳旧石器研究グループ
- 千葉英一 1985 「日本の旧石器 —北海道 (1) (2) (3)」『考古学ジャーナル』245, pp. 20-25, 248, pp. 20-26, 249, pp. 28-31, ニューサイエンス社
- 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』47, pp. 23-50, 駿台史学会
- 寺崎康史 2006 「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』pp. 275-314, 同成社
- 友田哲弘ほか(編)2001『桜岡 5 遺跡』旭川市教育委員会
- 長沼孝ほか(編)2001『白滝遺跡群Ⅱ』北海道埋蔵文化財センター
- 長沼孝・鈴木宏行・直江康雄(編)2002『白滝遺跡群Ⅲ』北海道埋蔵文化財センター
- 森内幸雄 1999 『日新 F 遺跡 —途別地区道営免農道整備事業に伴う発掘調査—』幕別町教育委員会
- 山田哲 2006 『北海道における細石刃石器群の研究』六一書房
- 山原敏朗(編)1999『帯広・落合遺跡 2』帯広市教育委員会
- 山原敏朗(編)2002『帯広・落合遺跡 3』帯広市教育委員会